

「臆せず告白する群れとして」（ルカによる福音書二二章一〜二二節）

1 ファリサイ派のパン種

二〇二二年、新しいこの年、礼拝をもつてはじめること、恵みであり、何より幸いなことです。

今年も、講壇では、つづけてルカによる福音書を取り上げます。ここから神の言葉に聞いていきます。

クリスマスを挟んで二回にわたって、私ども、イエスと、イエスに敵対するファリサイ派、および律法学者との、直接の、きびしいやりとりを見てきました。少し重苦しい箇所でした。

しかしこうした箇所のあること、またそれも飛ばさないで読んでいくことは大切なことです。イエスが、救い主として、そうした人生のきびしい道を歩んで行った、行かざるをえなかった、その証しの一つでもあるからです。

その上で、先週は、こんなことも申し上げました。福音書を書いたルカは、ファリサイ派、律法学者らと対峙するイエスを描きながら、じつは、その背後に、あるいはそれに重ねて、ルカの生きていた時代の教会の姿、在り方を見ていたのではないかということです。

先週は、私は、福音書記者ルカがそのように見ていたのではないかと、申し上げましたが、訂正する必要があるように思います。そのように見ていたのは、ルカではなくて、イエスご自身です。

ファリサイ派と律法学者に対して、きびしい批判の言葉を口にしたイエス、しかしその眼差しの先には、弟子たちのこともあったのです。この席に、あるいはその周りにいた彼ら、弟子たちこそ、そのようなファリサイ派や律法学者の轍（てつ）を踏むことなく、福音に生きる、宣教をなう群れとして、歩んで行ってほしいということがあったのではないかということです。

そのことが、今日の箇所からも、明らかにしているように思われます。最初の数節をお読みします。

とかくするうちに、数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった。イエスは、まず弟子たちに話し始められた。「ファリサイ派の人々のパン種に注意しなさい。それは偽善である。覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはない。だから、あなたがたが暗闇で言ったことはみな、明るみで聞かれ、奥の間で耳にささやいたことは、屋根の上で言い広められる」（一〜三節）。

イエスの語る相手がここで変わります。ここからは、ファリサイ派と律法学者ではなく、弟子たちになります。

その弟子たちにイエスは、「ファリサイ派の人々のパン種に注意しなさい」と語り

始めます。

注意していただきたいのは「パン種」という言葉です。もちろん酵母菌、イースト菌のことです。比喻として、イエスの言葉の中で、あるいは使徒の言葉でも、よく使われます。パン種は目に見えない。けれども、パン生地の中に紛れ込み、浸透し、見事にふくらませます。

イエスは、弟子たちが、ファリサイ派や律法学者と同じだといっているわけではありません。パン種に注意しなさいと言っているのです。偽善のパン種とも言われています。それは、信心深く見える、人前で、外からは、そのように見えるということでしょうか。しかしすべて、覆われていても、必ず現れ出ます。隠されていても、知られるようになります。

そのようなパン種に、弟子たちも、注意しなければなりません。人に見える外側ではなく、見えないこのころの内側が、神への愛と隣人への愛に、向けられていることです（一一・四二）。

そう考えれば、ファリサイ派と律法学者が、イエスによってやり込められたことを、私も喜んでばかりはいられません。弟子たちが、そして私も、彼らと同じようにならないとも限らないからです。

2 弟子たちに

ところでこのファリサイ派と律法学者（いまは同じような人たちとして申し上げますけれど）、彼らが、他人に対しても、自分においても、律法にこだわり、規則にこだわる背景には、神とは恐るべき神だ、裁きの神だという観念が、その根本にあったのではないかと思えます。そうしないと罰せられるという恐れがあったのではないかと思えます。

しかし、イエスは、御子イエスは、父である神について、そのようには教えていませんでした。聖書の神とはどのような方か、イエスは、どのように理解し、教えておられたのでしょうか。

友人であるあなたがたに言うておく。体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない。だれを恐れるべきか、教えよう。それは、殺した後で、地獄に投げ込む権威を持っている方だ。そうだ、言うておくが、この方を恐れなさい。五羽の雀がニアサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、神がお忘れになるようなことはない。それどころか、あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている（四〇七節）。

ここに、ファリサイ派と律法学者の信じている神と、イエスの教える神との違いがはっきり出ているように思います。イエスに従う者たちの生き方を決めるのは、この神理解の違いです。

ところでこの箇所、イエスが弟子たちを「友人」と呼びかけていることが、はじ

めに注目されます。

イエスが弟子たちを友と呼ぶと宣言しているところが、福音書には、この他にもう一箇所、ヨハネによる福音書にあります(一五・一五)。ルカのこの箇所を理解する上で参考になります。

ヨハネによる福音書によると、イエスが、弟子たちを、僕(しもべ)でなく友と呼ぶのは、僕は主人のしていること、つまり、神の御心を知らないのに対し、弟子たちは知っているからだと言っています。御子イエスによって父なる神の御心を知らされているからです。友と呼ぶというのは、御心を知り、行う、仲間、同士だからだというのです。

先ほど、フアリサイ派・律法学者は、神を裁きの神だと理解していたのではないかと申し上げました。その通りです。しかし、彼らの裁きの神は、律法を守ったり、規則に違反しなければ、裁きを逃れることができる、その程度の神、こちら次第でどうにもなる神です。それは、結局、人間がつくった神のイメージ(像)です。つまり偶像です。それに支配された悪しき宗教です。

これに対し、御子イエスによって啓示され、教えられている神、イエスの父なる神は、私どもの生と死そのものに権威をもちたもう神です。世界を創造し、保ち、治める、私どもの命の源である神にほかなりません。

この方を恐れよ、と、イエスは命じます。しかし決してフアリサイ派や律法学者のように恐れるではありません。神のご機嫌をそこねているのではないか、裁かれるのではないか、罰せられるのではないか、悪いことが起こるのではないかと、恐れるではありません。

そのような意味では、むしろ恐れなくていい神です。なぜなら、この神は、裁きの神ではなく、憐れみの神だからです。イエスは言います。市場を売られている(食用としてでしょう)中でもっとも安い雀、その一羽の雀さえ、神がお忘れになるようなことはない、と。まして私ども、雀に劣らぬ私ども、神がお忘れになるようなことがあるでしょうか。神の憐れみのご支配の中にあることに、どんなときでも、私どもは信頼していいのです。

3 告白する教会

今日の箇所、弟子たちに対するイエスの教えが、三つにまとめられ、示されているところですが、「イエスは言われた」という言葉が、それら三つの目じるしになっています(一、四、八節)。内容がそれぞれ違うように見えますが、決してそうではありません。共通の背景があるからです。

それは、弟子たちが、イエスと一緒に、エルサレムに旅していることです。イエスは十字架への道を辿っています。弟子たちは、その中で教えを受けています。キリスト・イエスによって開始された神の救いの働きに仕えるためです。イエスを救い主として伝える働きは、すでに始まっています。そこまで視野に入れて、イエスと弟子たちは、エルサレムに向かっているのです。

言っておくが、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、人の子も神の天使たちの前で、その人を自分の仲間であると言い表す。しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、神の天使たちの前で知らないと言われる。人の子の悪口を言う者は皆赦される。しかし、聖霊を冒瀆する者は赦されない。会堂や役人、権力者のところに連れて行かれたときは、何をどう言い訳しようか、何を言おうかなどと心配してはならない。言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる（八〇―一二節）。

エルサレムに向けて、イエスと弟子たちは旅しています。それが、これらの言葉の背景にあると申しました。

しかしここを読んで、十字架の出来事までに起こったこととしてすぐに思い出すのは、ペトロのイエスの否認（二二・五四以下）のことで、それ以外は思い出しません。つまり、ここで言われているのは、エルサレムまでの旅の中で起こることだけではなく、イエスの死と復活の後のこと、教会がその歩みの中で出会うであろうことなのです。

ここに「だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は」とあります。要するに、イエスを主と告白することです。しかも「人々の前で」です。だれもいないところで言うというわけではありません。使徒言行録七章に出てくるステファノのことを思い出すべきです。ステファノは、大勢のユダヤ人を前に、イエスをメシア（キリスト）として証しし、その結果石を投げられ殺されます。彼はイエスのように、ユダヤ人の赦しを執り成しながら死んでいきます。最初の殉教者でした。回心前のパウロもその場にいました。

教会は、まさにこうしたステファノのような告白をもって、今日まで歩んできたのです。「人々の前で」とは、このように告白することが、自分に不利な状況をもたらすことを知っていてなお、という意味です。教会はこうした告白によってこれからも形成されていきます。今日のこの礼拝も、いな礼拝こそ、この世の只中で、人々の前で、イエスを主と告白すること以外ではありません。

そしてこのような信仰と告白の根っ子のところに、主イエスに対する信頼があります。なぜならイエスも、この世における私どもの告白に対し、それをよしとし、天使たちの前で、自分の仲間であると言い表す（告白する）と約束しているからです。この約束が信頼の根拠です。

二〇二二年、年は改まりましたが、闇の中を歩いているような、まことに不確かな時代です。多様な力が働き、緊張が多くのところでも生まれています。私どもはどこへ連れて行かれるのでしょうか。このような時代、神が世界と教会の主であり、御心にしたがって、摂理をもって、導いておられることを、私ども、なお信じ、告白したいものです。

今日の聖書が教えるように、こうした信仰も告白も、聖霊の力によってのみなされるものです。この聖霊の力において、また友と呼んでくださる主イエスに導かれ、教会が、今年も、伝道においても奉仕においても、前進していくことができるように共に祈りたいと思います。

（一月二日）